

学生との協働で目指す
新たな団地のあり方



町田山崎団地自治会
会長 吉岡栄一郎さん
みんなの広場日替わり店長 岡田美和子さん

今、町内会・自治会の存在が大きくクローズアップされている。それは、阪神・淡路大震災と東日本大震災、この2つの大規模震災のときに町内会・自治会が重要な役割を果たした事例が多く報告されているからだ。

町田市にある町内会・自治会の総数は現在310。加入世帯率は約54%で、どの町内会・自治会にも課題が山積している。特に団地というロケーションでは、高齢化や独居高齢者、空家、そして建物の老朽化といった課題は更に顕著だ。そんな団地の活性化に、新たな取り組みで向き合う町田山崎団地自治会の事例を伺った。

総 戸数約3900戸の山崎団地は町田市でも「二の大型団地。昭和43年に入居を開始し、最盛期に住民は1万人を超えたが、現在では600戸が空き、自治会の加入率も50%を割っている。平成25年から3年間、国内の団地で初となるヤギによる除草の実証実験が行われた」ことでも有名だ。

会 長の吉岡さんは今年で就任11年目を迎える。団地が出来たほぼ同時期から居住し、活動に参加するようになったのは25年ほど前からだという。

「同じ団地に住む全ての人たちが住みやすく、そして快適に暮らせるように」と

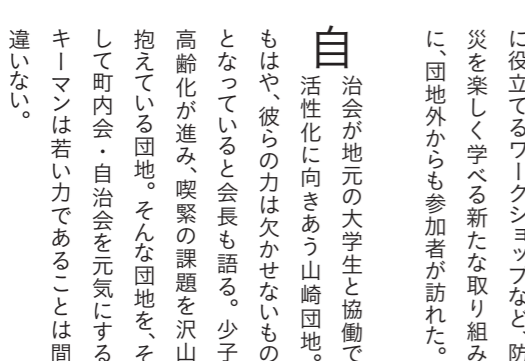
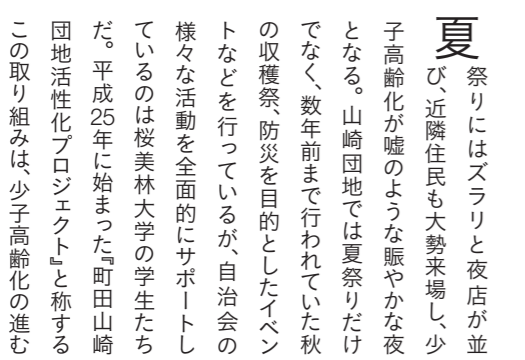
ようにと頑張っていきますよ。実現できていないけど、やりたいことはまだまだ沢山あります。団地も高齢化が進んできて、買い物しても帰るのが大変だったり、バス停までの移動さえ億劫な方も増えています。そんな人たちのために、ゴルフカートのような移動手段が導入できたらいいんじゃないか、とか。ただ、人の問題、お金の問題など課題は山のようにあって、試行錯誤しながらやっています。実は今年、名店会と自治会が1年おきに開催していた夏祭りを初めて合同で行うことになって、今、計画の真っ最中です。住民の皆さんからのリクエストもあって、それに応える形で開催することになりました。」

夏 祭りにはズラリと夜店が並び、近隣住民も大勢来場し、少子高齢化が嘘のような賑やかな夜となる。山崎団地では夏祭りだけでなく、数年前まで行われていた秋の収穫祭、防災を目的としたイベントなどを行っているが、自治会の様々な活動を全面的にサポートしているのは桜美林大学の学生たちだ。平成25年に始まった「町田山崎団地活性化プロジェクト」と称するこの取り組みは、少子高齢化の進む

山崎団地を活性化したいという学生の提案で始まったもの。団地のコミュニティを再生することをテーマに、かつて存在していた「子ども会」を復活させることも目的としている。

3 月4日・5日の両日、団地を管理する独立行政法人都市再生機構（UR都市機構）と協働で開催した「DANCHE Caravan」は、今年で3回目となる防災イベントで、2日間で960名もの来場者があった。災害時を想定したテントでの宿泊や、水が十分に使えない状況下での調理体験などの「団地deキャンプ」、薪割りや火おこし体験、地震車や煙ハウス、身の周りのものを緊急時に役立てるワークショップなど、防災を楽しく学べる新たな取り組みに、団地外からも参加者が訪れた。

自 治会が地元の大学生と協働で活性化に向きあう山崎団地。もはや、彼らの力は欠かせないものとなっていると会長も語る。少子高齢化が進み、喫緊の課題を沢山抱えている団地。そんな団地を、そして町内会・自治会を元気にするキーマンは若い力であることは間違いない。



A・災害時を想定し、テントが張られた団地内の広場 B・C・D桜美林大学の学生たちによる「子ども遊び」ブースには終日笑顔が溢れた C・キャンプファイヤーで盛り上がる参加者

The Machibito — Chitki ni Ikiru